

くりかえし符号

天 沼 寧

はじめに

ここで「くりかえし符号」というのは、いわゆる「おどり字」のことである。すなわち、語句を漢字、又は、仮名で書き表す場合、同じ字を続けて書く代わりに、又は、2字以上で書き表す語などを繰り返して書く代わりに用いる符号のことである。ただし、同じ字の繰り返しの場合でも、2字以上で書き表す語などの場合でも、あとの部分の音が、前の部分の音に対して、清音に対する濁音である場合にも、連濁を生じている場合にも用いられる。

また、近ごろでは、同じ数字、単位の名称、単位符号や、語句・短文等の繰り返しの代わりに用いるものを含めてということもある。

例えば、

アハハ（笑い声） を アハゝ

たたみ（畳） を たゝみ

すずしい（涼） を すゞしい

点点（てんてん） を 点々

人人（ひとひと） を 人々

毎日毎日（まいにちまいにち） を 毎日々々

などと書くことがあるが、このような場合につかう「ゝ」「々」などをいうのである。

このような働きをする符号は、以上の外、いくつかのものがあるが、これらを「くりかえし符号」というようになったのは、戦後のことである。それまでは、

おくり字 おどり字 かさね字 たたみ字

などといい、また、

ゆすり仮名 ゆすり字、あるいは、単に、ゆすり

ということもあった。なお、文章語としては、

重^{じゅう}字 重^{じゅう}点 重^{じゅうぶん}文 疊^{じよう}字

などの呼び名があった。

〔注〕 これらの名称の書き表し方はまちまちである。すなわち、古い書き表し方では、「送字」、「踊字・躍字」、「重字」、「疊字」、「揺仮名」、「揺字」などであり、いうまでもなく、漢字の字体も旧字体である。近ごろでは、「送り字」とか「揺すり字」などのように、含まれている活用のある語の送り仮名を送るのが、内閣告示「送り仮名の付け方」の本則による送り方に従った書き表し方である。なお、「おどり字」は「踊り字」とするものと、「躍り字」とするものがある。

また、「重文」は、「じゅうもん(ぢうもん)」と読ませているものと、「ちょうぶん(ちょうぶむ)」と読ませているものがあるが、これについては、後で触れる。

「ゝ」や「々」は文字か

以上に掲げたように、「ゝ」や「々」などの呼び名には、いろいろのものがあった。これらの呼び

名には「〇〇字」というように、文字としての名が多いし、明治以後、戦前までは「おどり字」という呼び名が最も一般的であったとみられる。そして、今日でもなお「おどり字」の呼び名は広く行われている。

ところで、これら「ゝ」や「々」などは、これ自体単独でつかわれることはなく、常に、漢字・仮名などの文字と共に、文字のあとにつかわれるものである。

また、「ゝ」や「々」は、それ自体の読みがない。常に、前にある漢字・仮名、又は、語句などと同じ読みで読まれることになっている。例えば、「アハゝ」の「ゝ」は、その前にある仮名文字「ハ」が表している音「ha」と同じ音、「ha」を表すものとしてつかわれており、この場合は、これを「ハ」と読むことになっている。「アハゝゝゝ」であれば、それぞれの「ゝ」は、いずれも「ハ」と読むことを表しているから、全体では、「アハハハハ」と読むということである。しかし、「タゝミ」という場合の「ゝ」は、「アハゝ」の場合の「ハ」の音を表す「ゝ」と全く同じ形であるにもかかわらず、「タ」と読むことになっている。つまり、「ゝ」は、これ自体の読みは決まっていなくて、その前にある仮名に応じて、その都度、読みが決まってくるのである。

「々」についても同様で、「点々」の「々」も、「人々」の「々」も全く同じ形であるが、前者の「々」は、「点」と同じく「テン」と読み、後者の「々」は、「人」の読みである「ヒト」ではなく、「人人」という語を書き表す場合、後ろの「人」を連濁によって「ビト」と読むのに従って「ビト」と読むのである。さらに、「毎日々々」の場合は、「々々」を「まいにち」と読むのである。

このことは、ちょうど、仮名で外来語を書き表す場合に用いる長音符号「ー」に似ている。例えば、「アース」、「エレベーター」などのように、長音を「ー」で表すことが行われているが、この「ー」も、それ自体の読みはなく、前の仮名が表す音節音の後ろの部分で1音節分延ばして発音することを示している。したがって、「アース」の「ー」は、「ア」という一つの単音から成る1音節の母音を1音節分延ばして発音することを示すものであり、「エレベーター」の場合は、「べ」の次の「ー」は、「べ」という子音と母音とから成る一つの音節の後ろの部分の母音「エ」を1音節分延ばすことを、また「タ」の次の「ー」は、「タ」の後部の母音「ア」を1音節分延ばして発音することを示している。すなわち、「ー」は、それ自体の読みは定まっておらず、常に、その前にある仮名の表す音に従って読むのである。

〔注〕「エレベーター」などを、「エレベータ」と書き表す向きもあるが、ここでは、このことは問題にしない。

「ー」は、一般に長音符号といい、文字とはいわない。それは、「ー」が一定の読みをもっていないからである。文字も、広い意味では、一種の符号といえなくもないが、文字には、少なくとも、それ自体定まった読み（発音）がある。

「ゝ」や「々」もその性質や働きは、「ー」と似たところがあり、その個々の具体語に使われた場合の読みは、「ー」よりもはるかに多く変化する。そこでこのようなものを文字の一種として「〇〇字」というのは、やかましくいえば不適切であり、近ごろのように「くりかえし符号」というほうがよいわけである。しかし、符号に濁点を付けて濁音を表すこともあり、文字と同じ取り扱いをしている面もある。

「くりかえし符号」という名の起こり

昭和21年3月、文部省は、『くりかへし符号の使ひ方〔をどり字法〕（案）』という小冊子*を印刷に付し、関係方面に配布した。これは、B6判、9ページのものである。ここで、従来、「おどり字（歴史的仮名遣いではくをどり字）」などといったものを「くりかえし（くりかへし）符号」と名

付け、これまで一般に使われていた4種の符号の外に、新しく1種を加え、それぞれの符号について、新しく呼び名を定めた。

* この小冊子は、終戦後の極端な用紙不足の時代であったので、ざら紙で、共紙の表紙、ホチキス止めのものである。表紙の裏に枠で囲んで、

本省で編修または作成する各種の教科書・文書などの国語の表記法を統一し、その基準を示すために、

- 一、送りがなのつけ方（案）
- 二、くぎり符号の使ひ方〔句読法〕（案）
- 三、くりかへし符号の使ひ方〔をどり字法〕（案）
- 四、外国の地名・人名の書き方（案）

の四篇を印刷に附した。この案はその一つである。

諸官庁をはじめ一般社会の用字上の参考ともなれば幸である。

（文部省教科書局国語調査室）

とある。〔以下、「小冊子」という。原文は、縦組み。なお、漢字の字体は、便宜上、現在通用のものをういた。以下、すべて、引用に当たって、特に断らない限り同じである。〕

これによっても明らかなように、この小冊子は、同時に印刷になった4種のうちの一つで、主として部内の資料として作成されたもののようである。国語審議会、その他の機関の審議の結果、決定したものではなく、また、文部省としても、しかるべき手続きを経て決定し、実施に移したのではなく、すべて「案」である。案ではあったが、ここで用いた「くりかへし符号」という呼び名、及び、それぞれの符号の呼び名は、しだいに社会一般に広まっていった。

その「まへがき」に、

- 一、この稿は、くりかへし符号を用ひる場合の基準を定めたものである。
- 二、くりかへし符号は同字反復の符号である。これまで、^で量字・^{ちゅうもん}重文・送り字・重ね字・をどり字・ゆすり字・ゆすりがな等と呼ばれて来たものであるが、この稿ではさらにあらたに一つの符号を取り上げるとともに、これらの性質を分りやすく言ひあらはし、かつ一般に通じやすいと思はれる呼び名として、かりに「くりかへし符号」といふ名を用ひた。

三、くりかへし符号は左の五種である。

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 一 ツ 点 、 | かなにつけて用ひるもの |
| くノ字点 < | かなまたはかな交りの語句につけて用ひるもの。 |
| ^{どう} 同ノ字点 々 | } 漢字につけて用ひるもの。 |
| 二ノ字点 々 (々) | |
| ノノ点 // | 数字や語句を代表するもの。 |

右、各種の符号の呼び名は、一部は在来のもので、一部は取扱ひ上の便を考へてあらたに定めたものである。

〔「四」以下を省略〕

以上のように、この小冊子では、くりかへし符号を5種採り上げている。「まへがき」に、「さらにあらたに一つの符号」を採り上げたとあるが、このあらたに採り上げた符号は、「//」（ノノ点）であろうと思われる。

また、各符号の呼び名について、「まへがき」に、「一部は在来のもので、一部は取扱ひ上の便を考へてあらたに定めた」とあるが、どれとどれとが在来のもので、どれとどれとがあらたに定めたものかははっきり分らない。

試みに、この小冊子が印刷に付される以前の国語辞典（8種）、百科事典（2種）に当たってみたが、この5種の名のうち、たとえ一つも見出しとして採録してあるものは1種も見当らなかった。もっとも、前述のように「ㄥ（ノノ点）」は、恐らく、この小冊子で新たに採り上げ、名付けたものと思われるので、採録されていないのがむしろ当然であろう。

なお、念のため、昭和21年3月以降に編集・発行の国語辞典（14種）・百科事典（2種）等にも当たってみたが、筆者が調べた範囲では、「ㄥ」を含めて、他の符号の名称を一つでも採録してあるものは、やはり1種もなかった。

ただし、国語辞典の多くには、「ちょん」を見出し語として立てており、その語釈の一つに、例えば、

- 点。（新小辞林 第三版）
- しるしに打つ点。ちょぼ。（広辞苑 第二版）
- 読点。「、」のこと。↯丸。
- 句読点や、何かの印、その場面で頻用する字の代用記号としての「ゝ」。（新明解国語辞典 第三版）
- 読点・おどり字・傍点として打つ「ゝ」「ゝ」「ゝ」の点。（三省堂国語辞典 第三版）

などと掲げている。

辞典によっては、「ちょん」を、単に点であるとか、読点と説明しているものもあるが、『三省堂国語辞典 第三版』などでは、はっきりと、「おどり字」の「ゝ」をもいうといている。「ゝ」は、その形は、少々違うが、小冊子にいう「一ツ点」に相当する。すなわち、「一ツ点（ゝ）」は「ちょん」ともいうということである。実際にも世間一般では、俗に「ゝ」を「ちょん」とか「ちょぼ」とかいているようであり、また、そういっても十分に通じると思われる。

各符号の用法と用例

5種のくりかえし符号について、小冊子を参考としつつ、その用法・用例等を述べる。用例は、なるべく実例を挙げるようにした。ただし、ここに掲げる用法は、現在ではほとんど用いないものも含めてある。

1 ゝ 又は ゝ

小冊子では「一ツ点」という名で呼んでおり、現在では、この名がかなり普及していると思われるが、俗に、「ちょん」・「ちょぼ」・「てん」などともいっている。

ある語を仮名で書く場合、同じ音を表す同じ仮名が2字（以上）続く場合、最初を仮名で書き、以下は仮名の代わりに、「ゝ」を書く。擬音語などでは、「ゝ」を数多く連ねる場合もある。

小冊子では、この符号のつかい方の準則を、

一、一ツ点は、その上のかな一字の全字形（濁点をふくむ）を代表する。ゆゑに、熟語になつてにござる場合には濁点をうつが（例2）、濁音のかなを代表する場合にはうたない（例3）。

二、「こゝろ」「つゝみ」などを熟語にしてにござる場合には、その「ゝ」をかなに書き改める（例4）。

【引用者注：例を省略する。】

としているが、戦前には必ずしもこのとおりではなかった。なお、「備考」として、この符号の起源を、

「ゝ」は「ゝ」をさらに簡略にしたものである。

としている。

明治以降の木版本・活字本等では、「ゝ」は主として片仮名に用い、「ゝ」は主として平仮名に

以下、実例によって用法を示す。

〔以下、各引用文などにおいて、漢字・仮名の字体は、便宜上、現在通用のものをを用いた。「・・・」は、引用者において省略したことを、「／」は、原文では改行になっていることを示す。なお、特に断らないかぎり、原文は縦組みである。〕〔また、実例の番号の右肩に〔図○〕とあるのは、写真植字では微妙な形が表せないので、必要箇所を原本から縮写し、凸版にして掲げておいたが、便宜上、すべて 45、46 ページにまとめてある。〕

(1) 同音・同字を表すもの、清音・濁音ともに用いる。

- ①「仁王へ紙をかみてふきつけると力が出る」といふをきゝ、
・ ・ ・ 【鯛乃味噌津^{かみ}津^{ちから}】、岩波版『江戸笑話集』による。427 べ〕
- ② 山「ム、わつちが負たら鰻を貳朱はづまう
【浮世風呂】、岩波版『浮世風呂』による。135 べ〕
- ③〔図3〕二人「ハ、、、、、、、、打ちわらひつゝ」【東海道中膝栗毛】、岩波版『東海道中膝栗毛』による。70 べ〕【付記：「、」が7個連続しているが、これは、『東海道中膝栗毛』において、最も連続の個数が多いものである。〔図3〕で明らかなように、版本では、7個の「、」は個々独立ではなく、連続した形となっている。なお、同書には、笑い声を描写した擬音語が24種、計272回用いてある。詳しくは、『近代語研究 第五集』（近代語学会編・武蔵野書院、昭和52.3.25刊所収）、〈東海道中膝栗毛』に使われている擬音語・擬態語について〉を参照されたい。）
- ④〔図4〕北「ハ、、、、ハ、、、、又こゝに湯本の宿といふは、・ ・ ・ 【同上、77 べ】【付記：「ハ」を10回繰り返していることになるが、途中で「ハ」の仮名が入っている。ただし、版本では、〔図4〕でみるように、左側の行を3字下げにした割り書きになっている。また、活字本では、片仮名には「ハ」、平仮名には「は」を用いているが、版本では、特に形の区別はないように見える。）
- ⑤・ ・ ・ 突当り^{つきあたり}の段梯子^{だんばし}を登つて二階^{のぼ}へ上る^{あが}茲^{ここ}処^{ところ}は六疊^{ぢやう}の・ ・ ・ 【新編 浮雲】、10 べ）【付記：「茲処」の振り仮名は平仮名であるが、「は」でなく、「ゐ」を用いてある。）
- ⑥〔図5〕「伊太利軍隊」中、帰国を欲するものゝみを擇びて之を率ひ、・ ・ ・ 【岩崎恒堂・三上寄風著：『世
- 〔図1〕
- 『和字大観抄 下』14 オ
- ここでは、「重文」に「チヨウブム」と振りが付くがあるが「小冊子」には「ぢうもん」とある。
- いすゞ

| いすゞ

いすゞ
- (1) 朝日新聞
昭和 58.10.26

(2) 読売新聞
昭和 58.10.27
- 〔図2〕

テヲ
ビノ
ニキ

疊字句

同字をすくひて用ひて聲名に云ふ。又重文とも云ふ。和子
呂をばくりと云ふ。天をどりやうと云ふ。片假字ハ、バ
ガラノ、チガク。平假字ハ、ずいさく、ちがくと書く。

〔圖 1〕

『和字大觀抄 下』14才

ここでは、「重文」に「チヨウブム」と振り仮名があるが「小冊子」には「ちうもん」とある。

いす | いす

(1) 朝日新聞
昭和 58.10.26

(2) 読売新聞
昭和 58.10.27

〔図 2〕

界十二女傑』26 ぺ、広文堂書店 明治 35.7.5)【付記：平仮名であるが「ゝ」を用いてある。】

⑦ 時俗ノ華飾ヲ事トシ、奢侈ニ流ル、ヲ議シテ曰ク、・・・【『小学中等読本 卷一』, 31 ウ】

⑧ 四国は、瀬戸内海を隔てゝ、山陽道に向ひ、・・・【『日本地理 高等小学校用 下巻』, 27 ぺ】

⑨〔図 6〕サ、舟【『小学国語読本 尋常科用 卷三』, 36 ぺ】

⑩〔図 7〕ちょっと 羽を つまゝうと したら ・・・、〔同上, 47 ぺ〕【付記：〔図 6〕と〔図 7〕とを比べてみると、片仮名に用いる符号と平仮名に用いる符号の形の違いがはっきり分かる。】

⑪ そこらにたゝずんでいるしかの細く高い脚の間を、・・・【『中等国語 一 (1)』, 30 ぺ】

⑫ 自今外国人ヲ雇入ル、者ハ外務省ニ届出ツルニ及ハス〔外務省令 第六号、明治 32.7.27 (原書房覆刻：『法令全書』による。)]

(2) 清音に対応する濁音を表すもの。この場合には、符号に濁点を付ける。

①〔図 8〕いち子「ハアレからのかゝみどんじヤア用はおごらないか。わしやア・・・【『東海道中膝栗毛』, 岩波版『東海道中膝栗毛』による。151 ぺ】

② 秋 は、しだい に すゝし。・・・【『小学国文読本 尋常科用 四』, 2 オ】

③ フハフハト空中ニタゞヨツテ居ルノハ、ホンタウニキレイデシタ。【『小学国語読本 尋常科用 卷五』, 78 ぺ】

④ 一つの場処にある植物の群落は永久にそのまゝの状態を保つものとは限らない。例へば現在の草原もそのまゝに放置すればやがて他から飛来した・・・【山羽儀兵著：『中等新植物』, 95 ぺ、東京開成館、昭和 12.9.10、訂正四版】(原文も横組み。)

⑤ いずこの、いずれの人にも理会されながら、その中に無限の意味が蔵されるようなことばをつづることができたら、・・・【『中等国語 二 (1)』, 5 ぺ】

(3) 濁音に対応する清音を表すもの。

①〔図 9〕田舎「はたごさア安かアとまりますべい とめ女「おはたごは式百ヅ、【『東海道中膝栗毛』, 岩波版『東海道中膝栗毛』による。59 ぺ】

②〔図 10〕そんだいにヤアあしたの昼食は、この柳ごりにいつばいつめてもらへば、もふほかになんにも入申さない。はたごは百十六文ヅ、も出し申さふ。〔同上, 59 ぺ〕

③〔図 11〕弥二「すいふろはいくつある。宿「お上と下と二ツづゝ、四ツござります。〔同, 70 ぺ〕【付記：以上の 3 例は、活字本では、接尾語の「づつ」(現代かなづかいによる。歴史的仮名遣いでは「づつ」)を「ヅゝ」、「づゝ」としてあるが、これは木版本でも、〔図 9, 10〕でみるように、片仮名の場合は、第 2 音節(第 2 字)を「ゝ」で表している。すなわち、この「ゝ」は、「ズ」の音でなく、「ツ」の音を表していることになる。〔図 11〕は平仮名で濁音を表していることになる。現代では、このようなつかい方はしないようである。】

④ ・・・亭主内義が入替り、けいはく、数を尽し上方のお客さまに、何をかひなひたる事をも、咄しの種になどゝ申。【『好色一代男』, 中央公論社版『西鶴定本全集 第一巻』(昭和 26.8.10 刊)による。85 ぺ】【付記：この場合も「…などと」である、すなわち、「ゝ」は、前の濁音に対応する清音を表すものである。】

⑤ ・・・彼二州は名だゝる勇猛の風あるに裾高くかげ・・・【雑誌『風俗画報 第六号』, 11 ぺ上】

⑥ ・・・遂に此ビヤボンを弄ぶことを厳禁したりといふ今また此玩具世に出でゝ市井の児童 弄ぶものあるを見受く【雑誌『風俗画報 第十二号』, 22 ぺ上】

例 ③～例 ⑥ は、いずれも、「ゝ」の前の音が濁音であるが、「ゝ」はそれに対応する清音を表している。小冊子では、このような場合には、「ゝ」をつかわず、仮名で書くとしているが、このようなつかい方は、過去のものでは、それほど珍しいことではない。新井白石の『東雅』にも「シノ、ラズ、キ」、「ハナズ、キ」(共に「ススキ」の 1 種)などがみえる。

また、「ゝ」を、清音に対する半濁音、半濁音に対する同じ半濁音を表すものとして用いることも考えられる。しかし、前者のような音連続を含む語は日常語にはないようであり、後者は、「パ、イヤ」などが考えられるが、実例を見付けることはできなかった。

2 〈

小冊子では、「くノ字点」と名付けている。正に平仮名の「く」の字を、ほぼ2字分の長さに伸ばした形である。横組みの場合には、2行分を必要とするので都合が悪い。そこで、本論では、便宜上、この符号を90度回して、「ㄣ」のようにして示すこととする。例えば、「いろいろ」を「いろㄣ」、「さまざま」を「さまㄣ」などとする。

この符号のつかい方の準則は、小冊子によれば、次のようである。

一、「ㄣ」は、二字以上のかな、またはかな交り語句を代表する(例1 2 3 4 5)〔引用者注：例を省略する。〕

現在は、ほぼこのように用いるが、明治以前のものには、漢字1字、又は、2字以上の場合にも用いられていた。なお、小冊子には「備考」として、この符号の起源を、

「ㄣ」は「ㄣㄣ」「ㄣㄣㄣ」を経て「ㄣ」となったものである。

としている。

(1) 同音の2音節を繰り返す4音節の量語のあと部分を表すもの。清音・濁音・半濁音ともに用いる。

- ① 「いやㄣ、人のなひととき申さう」とて、耳にさゝやきて、・・・〔『きのふはけふの物語』、岩波版『江戸笑話集』による。123 べ〕
- ② 〔図 12〕北「ドレㄣ^{トロもとへ}ア、ツ、ゝゝゝゝゝ、ばあさん、アツ、ゝゝゝゝゝ、とんだめにあはせた。コレ団子に火がくつついて、ア、びりㄣ^{あてがひ}する 弥「ハゝゝゝゝゝ、手めへ・・・ 北「エゝいめへましゝ。ベツㄣ 〔『東海道中膝栗毛』、岩波版『東海道中膝栗毛』による。67 べ〕
- ③ 〔梅大夫〕帰ろ、びよこㄣ三びよこㄣ。・・・〔洒落本『辰巳之園』、岩波版『黄表紙 洒落本集』による。314 べ〕
- ④ 「いやㄣ己が心にあるまじ、誰が教へけるぞ」と・・・〔『高等科用 帝国読本 卷之一』、7 ウ〕
- ⑤ スルト、今マデタルンデ居タ糸が、ダンㄣニ、マツスグニナリマシタ。〔『小学国語読本 尋常科用 卷五』、79 べ〕
- ⑥ 帰つて見ると、入口に下駄^{げだ}が幾足も並んで、奥ではがやㄣ人声がする。〔『小学国語読本 尋常科用 卷十』、39 べ〕
- ⑦ さうして、すゝのかゝつたガラスの面にはぎざㄣの線がゑがき出されるのでした。〔同上、47 べ〕
- ⑧ 間もなく、びりㄣと嬉しい呼子が鳴つた。〔同上、118 べ〕
- ⑨ みんなが、この気になれば、日常のことばも、だんㄣとわかりやすくなって行くにちがいない。〔『中等国語 二 (1)』、2 べ〕

以上のほか、例えば、『泡鳴全集 第三巻』〔昭和47.2.20、(株) 広文庫刊〕などには、「ごそㄣ」(37 べ)、「づかㄣ」(40 べ)、「でぶㄣ」(41 べ)などのように、濁音の繰り返しの場合に、符号にも濁音を付けているものがある。なお、この全集では、すべてがこのようなつかい方ではなく、「がらㄣ」、「づきんㄣ(6音節語)」、「がぶㄣ」など通常のつかい方のほうが多い。

(2) 量語(4音節)のあと部分が連濁を生じているもの。5音節以上の語でも、その4音節の部分が量語の形になっているものを含む。この場合は符号に濁点を付ける。

- ① 「いさゝかお腹^{はら}のたつほどの事では御座らぬ。これをしたとて、ことㄣ^しう叱^{しか}るゝ」とて、・・・〔『きのふはけふの物語』、岩波版『江戸笑話集』による。122 べ〕
- ② ・・・二階^{にかい}にかくれて待つ所へ、案^{あん}のごとく間男^{まんとこ}きたり、さまㄣちけいのあまりに、・・・〔同上、138 べ〕
- ③ 其途中、桜井ノ駅^{えき}ニテ、引キ具シタル子息正行ニ、忠義ノ遺訓、コマㄣトシテ・・・／・・・正成手ノ兵ヲ前後ニシテ、寄手ヲサンㄣニ・・・〔『帝国読本』 卷之六』、36 オ〕

- ④ すなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、資金をことごとく救助の用に当てたりき。
〔小学国語読本 尋常科用 巻十一〕, 176 べ〕
- ⑤ . . . 、そのことごとくが身振りほどわかりよくはないにしても、. . . 〔『中等国語 三 (1)』, 43 べ〕
- ⑥ ひとかんの土も、しみごとくとした反省をうながすやすがとなっている . . . 〔『中等国語 三 (2)』, 13 べ〕
- ⑦ 虫は、すゑむし。まつむし。はたおり。きりごとくす。てふ。 . . . 〔『高等国語 二 上』, 6 べ, 「枕草子抄」〕
- (3) 漢字と仮名(送り仮名を含む。)とで書き表した語を繰り返す場合に用いるもの。後ろ部分に連濁を生じている場合には、大体において、符号に濁点を付けるが、付けていない例もある。
- ① 「言難いナ」と離れごとくに成ッてゐるから急には起揚られぬ . . . 〔『新編 浮雲』, 77 べ〕(濁点が付いていない。)
- ② . . . 約九百年の昔に書かれた源氏物語が如何によく人間を生きごとくと、美しく、細かく写し出してゐるかがわかるでせう。〔『小学国語読本 尋常科用 巻十一』, 16 べ〕
- ③ 行つてみると、正雄君のうちではもう縁先に望遠鏡をすゑ付けて、にいさんと正雄君が代るごとく観測をしてゐる。〔同上, 164 べ〕
- ④ 此の版木は今も万福寺に保存せられ、三棟の倉庫に満ちごとくたり。〔同上, 178 べ〕
- ⑤ 一つごとくみな違っている実物については、 $1+1=2$ ということもできねば、 $1\times 2=2$ というのもできない。〔『中等国語 一 (2)』, 31 べ〕
- ⑥ 騒ぎくたびれてみんな散りごとくにわがやへ帰り、ぼくはひとり桂のうちに立ち寄った。〔同上, 40 べ〕
- ⑦ 友だちどうしてでありながら、お互いに、離れごとくになり、なかが悪くなり、時には、. . . 〔『中等国語 二 (1)』, 2 べ〕
- (4) 漢字 1 字で書き表す語等に用いてあるもの。
- ① . . . 檀那衆 是を見て、「中」ごとくのことぢや。其儀ならば、. . . 〔『きのふはけふの物語』, 岩波版『江戸笑話集』による。122 べ〕
- ② . . . 「その事にて候。表向は我」もすきの道にて候へは、. . . 〔同上, 138 べ〕
- ③ 永」の浪人にて尾羽をうち枯らし、. . . 〔『鹿の巻筆』, 岩波版同上, 180 べ〕
- ④ . . . 今日、年のはじめ月のはじめ日のはじめなれば、門出めでたしと、酒を五杯ひつかけて、まづ町」を、. . . 〔同上, 207 べ〕
- ⑤〔図 13〕. . . 明らさまに其謀を告げ、三人をして、各々其懷より短刀を出ださしむ。〔『小学国文読本 尋常科用 八』, 16 オ〕
- ⑥〔図 14〕. . . 善良なる臣民多きときは、日本帝国ハ益々強盛なるべく、. . . 〔同上, 44 オ〕
- ⑦〔図 15〕. . . 光沢益々強クシテ其最モ強キモノヲ明光ト謂フ . . . 而シテ其光輝稍々弱ク . . . 〔『礦物小学』, 8 オ〕
- ⑧〔図 16〕. . . 光沢少ナク稍々絹糸光アルノミ . . . 〔同上, 33 オ〕〔付記：⑤～⑧のくりかえし符号「く」は、〔図 13〕～〔図 16〕でみるように、その形は、小さい「く」字点のように見える。しかし、いずれも漢字の右下方にあり、また、〔図 15〕の 1 行めのもののように、「ゝ」の形のものもあるので、この 2 資料が木版本であるらしいことを思い合わせれば、これらはすべて、「ゝ」(二ノ字点)とみたほうがよいのかもしれない。〕
- (5) 漢字 2 字で書き表す語の繰り返しに用いてあるもの。
- ① ばんとう「ナニ、湯氣に上つた。夫は大変」 . . . 〔『浮世風呂』, 岩波版『浮世風呂』による。73 べ〕
- ② . . . /と故意」手で形を拵らへて見せ 〔『新編 浮雲』, 13 べ〕
- ③ . . . 薫になつて遂に不精」に鎮火る文三は . . . 〔同上, 136 べ〕

④〔図 17〕・ ・ ・ 届かざりけるが、次第〱に高く跳びて、・ ・ ・ 〔『高等国語読本 巻四』, 39 オ〕

(6) 振り仮名として用いてあるもの。

① 年々歳々花あい^{ねんねさい}くち、焉馬^{まんば}がはなしをするならば、・ ・ ・ 〔『落無事志有意』, 岩波版『江戸笑話集』による。452 ペ〕

② ・ ・ ・ またもや御意^{ごい}の爰^{こゝ}らぬ内^{うち}にと挨拶^{あいさつ}も勿々^{そこ}に起^たッて坐敷^{ざしき}を立^{たち}出^{いで}で・ ・ ・ 〔『新編 浮雲』, 136 ペ〕

③ ・ ・ ・ ベチャクチャと饒舌^{しゃべり}り出^だしては止^{とど}度^どなく滔々^{とうとう}蕩々^{とうとう}として・ ・ ・ 〔同上, 150 ペ〕

④ 「・ ・ ・ 皆此ノ成果ヲ見ルニ及ンデ、唯々感激ノ極、言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。」〔『小学国語読本 尋常科用 巻十一』, 60 ペ〕

(7) 3 字以上で書き表した語句・短文等を繰り返す場合に用いてあるもの。どの部分を繰り返すのかが、必ずしもはっきりしない場合がある。例えば、「早く来い〱。」は、「はやく、こいこい。」か「はやくこい、はやくこい。」かが明確でない。

① 「それは何の書物に有」といへば、「諷^{うたひ}の本に有。「高砂^{たかさご}の浦^{うら}に着^つきにけり〱」と有」「それは目出たひ事故くるしからず」「然らば、「跡^{あと}とぶらひてたび給^{うたひ}へ〱」といふ語も有^{ある}ぞや。〔『軽口露がはなし』, 岩波版『江戸笑話集』による。235 ペ〕〔付記：はじめの「〱」は「着きにけり」だけの繰り返しではなく、「高砂の浦に着きにけり」を2 度繰り返すのであり、あとの「〱」も「跡とぶらひてたび給へ」を繰り返すのである。〕

② 元日^{さうじつ}の早朝^{さうてう}から、「御慶^{ごれい}申入れます〱」といへども、一向^{いつかう}へんじなし。〔『鯛乃味噌津』, 岩波版同上。426 ペ〕〔付記：この場合の「〱」も「御慶申入れます」を繰り返すことを示している。〕

③ 北「ヤアイたすけぶね〱〔『東海道中膝栗毛』, 岩波版『東海道中膝栗毛』による。74 ペ〕

④ 何時^{いつ}も〱其度^{そのたび}ごとに・ ・ ・ 〔『新編 浮雲』, 23 ペ〕

⑤ 嗚呼^{あゝ}つまらん〱・ ・ ・ 〔同上, 74 ペ〕

⑥ さう何時^{いつ}までもお懐^{はつ}中^{ちゅう}で遊ばせても置^おけないと思^{おも}ふと私^{わたし}は苦勞^{くろう}で〱ならないから・ ・ ・ 〔同上, 90 ペ〕

⑦ しかしながら之^{これ}を親^{おや}子^こ喧嘩^{けんわ}と思^{おも}ふと女丈夫^{ぢやうふ}の本意^{ほんい}に負^{そむ}くどうして〱親子^{おやこ}喧嘩^{けんわ}……〔同上, 135 ペ〕

⑧ 「真個^{ほんごと}に往きませうか／「お出でなさい〱〔同上, 161 ペ〕

⑨ むかし〱、ある 山かげ に、猿 と かに と ありたり。〔『小学国文読本 四』, 21 オ〕

(8) 「〱」を二つ以上重ねて用いてあるもの。

① 弥二^{やに}「ふたつばかりくりやれ。ガリ〱〱。・ ・ ・ 〔『東海道中膝栗毛』, 岩波版『東海道中膝栗毛』による。150 ペ〕

②〔図 18〕北八^{きたはち}「ハ、ハ、ハ、ハ、まちなよ。・ ・ ・ 弥二^{やに}「・ ・ ・ トつゝみ紙^しをあけてくすり^{くすり}をとり出しガリ〱〱〱〱。ア、又何を・ ・ ・ 〔同上, 150 ペ〕

③〔図 19〕^{その}鏡^{かがみ}の音^{おと} チャラ〱〱〱〱〱〱〱〔式亭三馬^{しきやうさんば}『浮世風呂^{うきふうりょ}』文政 9, 春〕

④ うは「お嬢^{じやう}さんだ〱〱〱〱〱〱〱。お嬢^{じやう}さだ〱〱〱〱〱〱〱〔『浮世風呂』, 岩波版『浮世風呂』による。166 ペ〕

⑤ 味能^{あじな}うながしいな。ア、いた。ア、いた〱〱〱〱〱〱〱〔同上, 135 ペ〕

⑥ へんし「ハアイ。トン〱〱〱〱〱〱〱〱〱トあし音^{おと}のまねして風呂^{ふうりょ}・ ・ ・ 〔同上, 302 ペ〕
の中^{なか}のはめをたゞき

以上のように、「〱」を二つ以上重ねて用いる場合は、活字本では、符号と符号との間をあけて必要な数だけ並べて用いるが、本版本では、〔図 18, 19〕で分かるように、互いに交差していたり、接触していたりしている形である。

3 ヲ

小冊子では、これを「同ノ字点^{どう}」と名付けている。この名付けは、その「備考」に、〈「々」は「全」の字から転化したものと考えられてゐる。〉とあるところからであろう。すなわち、「全」は、

〈「同」の異体字〉とか、〈「同」の古字〉とか、〈「同」と同じ。〉などいうことから名付けたものであろう。なお、『和字大観抄』には、「日本の々の字。本拠を詳にせず。疑らくは。上の字の草書を誤りたるならん。・・・」とある。「々」のつかい方の準則として、小冊子では、

一、「々」は漢字一字を代表する（例 1 2 3 4 5）。【引用者注：「例」を省略する。】

としている。現在の公用文では、このとおりのつかい方であるが、明治時代には、いろいろのつかい方があり、現在でも新聞によっては漢字 2 字で書き表す語の繰返しにもつかっている。また、現在は、「々」を 1 字分の大きさで表しているが、木版本などでは、「々」と同様に、漢字の右下側に小さく表しているものもある。

「々」も、起源はともかく、現在は、符号であって、文字ではない。したがって、漢和辞典等でも採録しないのが普通であるが、例えば『大漢和辞典』（諸橋轍次著 大修館刊）では、「、」部の 2 画に「々」を掲げ、「同一文字量用の記号。」とし、『新選漢和辞典 新版』（小林信明編 小学館刊）でも、同じ部首に、「同じ漢字のくりかえし記号。」として掲げている。

「々」と、次に取り扱う「々」とは、はっきりしたつかい分けがないような点もあるが、『和字大観抄』によれば、〔図 20〕でみるように、「々」は楷書に用い、「々」は草書に用いるとしている。

- (1) 漢字 1 字を繰り返す場合に、その漢字の代わりに用いてあるもの。連濁を生じている場合にも、濁点を付けない。文字の右下側に小さい形で付けてあるものもある。

① 年々歳々花あいくち、焉馬がはなしをするならば、・・・【『落無事志有意』、岩波版『江戸笑話集』による。452 べ】

② ・・・其年の暮に一等進んで本官になり昨年の暑中には久々にて帰省するなど・・・【『新編 浮雲』、29 べ】

③ ・・・祭礼の済みたる後には遂に身代を限るもの往々ありしを以ても・・・【『雑誌『風俗画報 第六号』、6 べ下】

④〔図 21〕・・・敗レハ則共ニ死ナンノミト、益々進ミ戦フテ馬斃ル、会々流矢来リテ顔ニ中ル、・・・【『小学中等読本 卷之一』、31 ウ】〔付記：明らかに形は「々」であるが、右下に小さく、読点や漢文式の送り仮名と同様な取り扱いである。〕

⑤〔図 22〕・・・都下ニ屢々火アルヲ患ヒ、火ヲ失スル者ヲ誅シ・・・【同上、53 ウ】〔付記：同じ本であるが、「々」を漢字の下に、大きく 1 字分とっている場合もある。〕

⑥ ・・・農工商の別ちなく、皆これに入りて、種々の事を学び得しむるに至りしかば、・・・【『尋常小学読本 卷之七』、57 ウ】

⑦ 相伴役の人々其意を尋ねけるに、一々詳に、説き聴かせて、・・・【『小学国文読本 尋常小学校用 八』、15 ウ】

⑧ 鉄眼、こゝにおいて再び意を決し、喜捨せる人々に説きて出版の事業を中止し、・・・【『小学国語読本 尋常科用 卷十一』、176 べ】

⑨ その他の山々も見えるさうだが、今日は何も見えない。【『中等国語 二（中）』、9 べ】

⑩ ・・・編成局の人々とはまた別な、技術上の苦心を日夜続けています。【『中等国語 一（3）』、29 べ】

⑪ このような叙述の方法や工夫は、様々な話や文章を、表現する立場に立って聞いたり読んだりして理解させていくと効果的であろう。【『高等学校学習指導要項解説 国語編』、22 べ、MEJ 1-7905、文部省（昭和 54 年 5 月）、ぎょうせい、昭和 57.7.10 刊】〔原文も横組み。〕

⑫ この指導事項は、文章の種々の持ち味や技法、個々の文章のスタイルに関心と注意をもたせるこ

草書
年々歳々花あいくち、焉馬がはなしをするならば、・・・
其年の暮に一等進んで本官になり昨年の暑中には久々にて帰省するなど・・・
祭礼の済みたる後には遂に身代を限るもの往々ありしを以ても・・・
敗レハ則共ニ死ナンノミト、益々進ミ戦フテ馬斃ル、会々流矢来リテ顔ニ中ル、・・・
都下ニ屢々火アルヲ患ヒ、火ヲ失スル者ヲ誅シ・・・
農工商の別ちなく、皆これに入りて、種々の事を学び得しむるに至りしかば、・・・

〔図 20〕
『和字大観抄 下』14 オ
（〔図 1〕の続き）

とをねらいとしている。〔同上, 33 べ〕

- ⑬ 1 漢字使用について／・・・／(2)「常用漢字表」の本表に掲げる音訓によって語を書き表すに当たっては、次の事項に留意する。／ア 次のような代名詞は、原則として、漢字で書く。／例 彼何 僕 私 我々 【以下省略】〔公用文における漢字使用等について, 昭和 56.10.1, 事務次官等会議申合せ〕〔原文も横組み〕

- ⑭ ・・・・年々の経費分だけは運賃収入だけで賄いたいという、・・・〔「朝日新聞」社説, 昭和 50.10.21〕

- ⑮ ・・・・八人の職員が黙々と事務を執っていた。〔「朝日新聞 (夕刊)」, 昭和 56.3.28〕

- ⑯ 文化活動のさまざまな分野で、すぐれた業績を残した人々を顕彰することは・・・〔「読売新聞」社説, 昭和 58.11.3〕

- (2) 漢字 2 字で書き表す熟語を二つ重ねる場合に用いてあるもの。連濁を生じる場合にも、濁点は付けない。

- ①〔図 23〕・・・あれをかうして是れを斯うしてと毎日々々勤へてぼつかみんださうしたら・・・〔「新編 浮雲」, 116 べ〕〔付記:「々」に対して、振り仮名としての「〱」を漢字の読みに対応させて一つ一つに付けてある。〕

- ②〔図 24〕・・・諸事万事御意の随意々々曾て抵抗した事なく・・・〔同上, 144 べ〕〔付記:「随意々々」を振り仮名からみると、「まにまにまに」と読むのかとも思えなくもなくもないが、そうではなく、この場合の「〱」は、仮名 1 字 (1 音) を表しているものであって、「まにまに」と読むべきである。〕

- ③〔図 25〕其両端二尺五寸許の青赤々々と交々二尺程なるを隅に至る迄・・・〔雑誌『風俗画報 第十四号』, 9 べ下〕〔付記:「青赤々々」は、「あお あか あか あか」ではなく、「あお あか あお あか」であろう。〕

- ④ たま〱見かける大原女も、大路小路を行く人の言葉も、川原々々にさらす友禅染も、・・・〔「小学国語読本 尋常科用 巻十一」, 12 べ〕

- ⑤ 「・・・先づ土台を作って、それから一步步々高く登り、最後の目的に達するやうになさい。」「同上, 73 べ〕

- ⑥ ・・・・、やさしい沈んだ調べは、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう・・・〔同上, 161 べ〕

- ⑦ 記録は破られるものだが、陸上などと違って相撲の場合は一番々々の積み重ね。・・・だがワシが一番々々を一生懸命に取ってきた結果が 81 勝になったように、・・・〔新聞「スポーツ ニッポン」大鵬親方の話, 昭和 53.7.17〕

- ⑧ 「一步步々の歩みが北海道の子どもの村へつながっていると思うと勇気がわいてきます。そして、僕の歩いた一步步々が・・・」〔「毎日新聞」, 昭和 58.10.24〕

4 ㄣ 又は ㄤ

小冊子では、「二ノ字点」と名付けている。なぜこのように名付けたのかはつまびらかではないが、小冊子の「備考」に、

「ㄣ」は「二」の草書体から転化したものと考へられてゐる。／それを小さくして右に片寄せたのが即ち「ㄣ」である。

とあるところからみると、この形が漢数字の「二」から出たことからの呼び名であろう。

『国語学大辞典』(東京堂出版, 昭和 55.9.30 刊)には、

中国では漢字の反復には、「ㄣ」「ㄣ」「ㄣ」「ㄣ」の如きものを先秦時代から用いており、一字の重複には「堂ㄣ」、二字または三字以上の反復には、「多ㄣ謝ㄣ」「多謝ㄣ」の両様を用いた。

とある。

小冊子では、この形を、右寄せの場合は、「ㄣ」としているが、1 字分として用いるときは、「ㄣ」の形を採っている。しかし、実際には、「ㄣ」の外に、「ㄣ」の形もたくさん用いられている。

二ノ字点の用法は、小冊子によれば、

一、「ゝ」は、手写では「々」と同様に用ひられるが（例1）、活字印刷では「々」の方が用ひられる（例2）。

二、活字印刷で用ひる「ゝ」は「ゝ」の別体であるが、その働きは、上の一字を重ねて訓よみにすべきことを示すものである（例3 4）。

三、「唯」は「唯ゝ」とは書かない（例5）。

四、「各の」「諸の」は「ゝ」がなくても読みうるが（例6 7）、普通には「ゝ」をつける（例8）。

五、「ゝ」は「々」で代用される（例9 10）。殊に「多々益々」ではかならず「々」を書く。〔「例」はすべて省略した。〕

ということである。

以下、実例を掲げれば、次のとおりである。

(1) 仮名1字の代わりに用いてあるもの。

① 景山公の歌に／いまよりはこゝろのとかに花そ見ん／入相つくるかねしなけれは〔雑誌『風俗画報 第四号』、4 べ下〕

② ……これ我美濃国の深山幽谷の清流に産するウルゝといふ物にて…〔同上、第二十号、13 べ上〕

(2) 漢字1字の代わりに用いてあるもの。連濁を生じる場合にも濁点を付けない。

① ……往古より御掟にて貴賤となく各祭る式にて候処漸々仏門の…〔雑誌『風俗画報 第四号』、4 べ下〕〔付記：「各」の字の右下に小さい「ゝ」を付けているが、活字1字分を当ててある。〕

② ……此上とも面々教養を尽し…〔同上、同ページ〕

③ 問ゝ小十人等も願ひて行ふことあれども…〔同上、第六号、4 べ下〕

④ 日枝と神田の祭礼とは共に東都の二大祭礼にて交ゝ相行ひ〔同上、6 べ下〕〔付記：振り仮名の「ゝ」に濁点を付けていない。〕

⑤ ……十二里は即十三里に当る云ゝとあり…〔同上、9 べ上〕

⑥ 通常のものより形稍ゝ小さく…〔同上、10 べ下〕

⑦ 此時居合せたる人ゝは…〔同上、18 べ上〕

⑧ ……漸く四月中旬に至りて少ゝ相始まり…〔同上、21 べ上〕

⑨ ……江湖の君子願くは猶益ゝ投稿あらんことを〔同上、第八号、22 べ下〕

⑩〔図26〕群児代ルゝ取り見テ。頻ニ奇ト称ス。〔『増訂小学読本 高等科 巻三、4 オ』〕〔付記：〔図26〕でみるように、この符号は、「ゝ」であるのか、「ゝ」の小さい形のもの、「く」であるのかははっきりしない。〔図27〕の「ゝ」と比べると、多少形が違っているようにもみえる。〕

⑪〔図27〕年紀君ニ此スレバ稍ゝ長ゼリ。〔同上、10 ウ〕

⑫ 抑ゝ其器ハ木製ナリヤ将タ鉄製ナリヤ。〔同上、12 ウ〕

⑬ 各ゝ弾機アリ条帯アリテ相連ルトハ。〔同上、15 オ〕

⑭ 是ニ於テ兄弟大イニ異シミ。一夜各ゝ潜伏シテ之ヲ伺ハントシ。偶ゝ圓上ニ相逢フ。由テ相語ルニ。始メテ其故ヲ知り。是ヨリ親愛ノ清益ゝ深カリシト云フ。〔同上、20 オ〕

(3) 仮名1字の繰り返しであるが、2 個、又は、3 個連続して用いてあるもの。

① 「アハゝゝ 其奴は大笑ひだ……しかし可笑しく思ッてゐるのは鍋ばかりぢやア有りますまい 必と母親さんも……〔『新編 浮雲』、45 べ〕

②〔図28〕「へーゝゝ 恐れ煎豆はちけ豆ッ。…些 と自分の頭の蠅でも逐ふがいゝや面白くもない／ 「エへゝゝゝ／ 「イエネ此通り親を馬鹿にしてゐて…〔同上、94 べ〕

(4) 仮名、又は、漢字2 字以上で書き表す語等を繰り返す場合に、「ゝ」を二つ以上連続して用いてあるもの。

① ……或はラツキヨウの化物なりとさわき皆々擡を以て之を乱打せしにフハゝゝと飛行くを追廻し打擲くより…〔雑誌『風俗画報 第二十四号』、21 べ下〕

現在のところ、公用文でも、新聞界等でも、「ク」については何もふれてはいない。しかし、次に掲げた二、三の例によっても分かるように、実際には用いられているようである。

年月日	場 所	事故形態	死 者	負傷者
38.5.4	鈴 鹿	コース逸脱転落	浅野 正雄選手	
40.8.21	//	ガードレールに 激突炎上	浮谷東次郎選手	
41.5.3	富 士	横転大破	永井 賢一選手	
43.10.10	//	横転大破	渡辺 彰選手	
44.2.12	袋井市のテ ストコース	コース逸脱	福沢 幸雄選手	
45.8.28	鈴 鹿	土手に激突大破	川合 稔選手	
48.11.23	富 士	ガードレールに 激突炎上	中野 雅晴選手	選手ら3人
49.6.2	//	多重衝突炎上	風戸裕、鈴木誠 一選手	観客8人
50.7.27	//	コース逸脱	監視員1人	監視員1人
52.10.23	//	事故車がコース 逸脱	ガードマンら2 人	観客7人
55.3.18	鈴 鹿	コース逸脱	監視員2人	観客ら2人
58.5.1	富 士	ガードレールに 激突炎上	佐藤 文康選手	
58.10.23	//	コンクリート壁 に激突	観客1人、高橋 敏選手	観客4人

評議委員長(総代) 〃
 副委員長(〃) 〃
 委員(〃) 〃
 〃 (〃) 〃

〔図 31〕
朝日新聞
昭和 58.11.12
(会葬御礼広告
の一部)

1 年	東京	稲付中学校	1 年生	7 学級分	348人
2 年	"	稲付中学校	2 年生	2 学級分	85人
	"	四谷第二中学校	"	"	79人
	"	砂町中学校	"	"	76人
	"	教育大附属中学校	"	"	82人
	"	武蔵野第三中学校	"	"	43人
5 校					計 365人

女	○	A	・ド	ノ	バル	(シンソソ化製品)	2
ク	○	C	・ス	ノー	ブル	(東 芝)	1
ク	○	J	・ス	ポ	ストラ	(日本電気)	18
男	○	L	・シ	ョ	ン	(松下電器)	18
ク	○	F	・カ	ウ	ア	(東 芝)	2
ク	○	○	・ハ	ー	ン	(ク)	2
ク	○	○	・ハ	ー	ン	(熊谷組)	2
ク	○	○	・ギ	ン	グ	(秋田いすゞ)	2
ク	○	○	・ヤ	ン	グ	(ク)	2
ク	○	○	・ウ	ィ	ル	(三登機)	2
ク	○	○	・張	炳	燭	(愛知機械)	2
ク	○	○	・注	○	印	(新)	1

〔図 33〕 朝日新聞（夕刊） 昭和 58.11.10

各符号の実際の形・用法等について、そのいくつかを選んで、以下にまとめて掲げる。ここに掲げるのは、〔図3〕から〔図19〕までと〔図21〕から〔図28〕までである。このうち、〔図3, 4, 8, 9, 10, 11, 12, 18〕は、株式会社日本文化資料センター刊の複製本『東海道中膝栗毛』（昭和58.7.10発行）によった。また、〔図19〕は、石川了氏から提供を受けたものである。なお、図版はいずれも原寸よりも縮小してある。また、本文中の図版も、〔図1〕, 〔図20〕, 〔図29〕は縮小してある。ただし、縮小率は、必ずしも同一ではない。

$\frac{1}{\sqrt{x}}$

これは、 x の逆平方根である。つまり、 x が大きくなると、この値は小さくなる。

〔図 3〕
初編の 27 ウ

うけてまゐせむら。ゆへにうしろふ^{うしろ}はまきやアが^あび^び〜
 又ふ湯^ゆの字^じより^{より}また^{また}別の家^{とけ}に^にま^まじ^じやう^{やう}ふ^ふ〜

〔図4〕
初編36ウ

ちよつと羽を
つまゝうとしたら、

〔圖 7〕

を欲するもの、みを探ひて之を率ひ、

〔図 5〕

いよ
ハムやのうへんまふりおづる。

〔図 8〕

雄

十二 サ、舟

太郎「正雄サン、サ、舟ヲナガシテアソビマセウ。」

正雄「ア、サウシマセウ。サ、舟ノキャウサウヲシマセウ。」

「ゝ」を新出文字・読み替え文字と同じく、上欄に掲出してある。なお、「〈」を次の37ページに、「々」を53ページに掲出してある。「ム」は43ページに初出するが、上欄に掲げていない。

「おち、おち、おち、おち、おち」

〔図9〕
初編 12 ウ

えとごハるふアツし

〔図 10〕
初編 12 ウ

あふくふと二りぞ。

〔図 11〕
初編 28 ウ

〔図 18〕

〔圖 17〕

〔図 16〕

〔図 15〕

[図 14]

[圖 13]

〔図 12〕
初編 23 ウ

〔圖 28〕

〔図 27〕

〔図 26〕

〔図 25〕

〔図 24〕

〔圖 23〕

〔図 22〕

〔図 21〕

[図 19]

用例の出典について

出典は、本文中に詳しく記したのも二、三あるが、ほとんどのものは、書名だけで、その詳細を省略した。よって、以下に一覧表の形にして掲げておく。(順序不同)

江戸笑話集 日本古典文学大系 岩波書店 昭和 43. 5.30	日本地理 高等小 下巻 山上 富山房 明治 34. 1.15 学校用 万次郎 訂正四版
浮世風呂 “ “ 昭和 43. 9.15	小学国語読本 尋常科用 卷三 文部省 昭和 13.12.29 (修正版)
東海道中膝栗毛 “ “ 昭和 43. 6.30	“ “ 卷五 “ 昭和 10. 2.11
黄表紙 洒落本集 “ “ 昭和 33.10. 6	“ “ 卷十一 “ 昭和 14. 2.29 (修正版)
新編浮雲 第一篇 金港堂 近代文学館 昭和 43.12 明治 20.6 名著復刻全集	中等国語 二(中) 文部省 昭和 21. 7. 5
風俗画報(雑誌) 東陽堂 昭和 22年 2月 から発行	“ 三(中) “ 昭和 21. 7. 5
小学中等読本 卷之一 木沢成肅編 明治 14. 6.28 版權免許	“ 一(1) “ 昭和 22. 7.10
礦物小学 松本栄三郎纂訳 金森閣 明治 16.11.22 再版御届	“ “ (2) “ 昭和 22. 9. 8
尋常小学読本 文部省大臣官房図書課蔵版 明治 20. 4.29 版權所有届	“ “ (3) “ 昭和 23. 1. 9
増訂小学読本 高等科 卷三 内田 金港堂 明治 20. 7.29 校正御届	“ 二(1) “ 昭和 22. 3. 7
小学国文読本 尋常小学校用 四 山県 文学社 明治 26. 9.18 栄三郎 訂正版	“ “ (2) “ 昭和 29. 9. 8
“ “ 八 “ “	“ 三(1) “ 昭和 22. 3.18
高等 帝国読本 卷之一 学海指針社 明治 27. 3. 6 科用 訂正再版	“ “ (2) “ 昭和 22. 9. 8
高等 国語読本 卷四 金港堂 明治 33.12.23 訂正再版	高等国語 二(上) “ 昭和 22. 3.31

くりかえし符号使用の移り変わり

各種くりかえし符号の起こりについては、本論では先に、小冊子に載せてあることを紹介したが、なお、『国語学大辞典』(東京堂出版、昭和 55 年 9 月 30 日発行)の「躍り字」の項に、中田祝夫氏の詳しい解説があるので、それを御覧いただきたい。この論は、「小冊子」に基づき、極めて不十分ではあるが、江戸時代・明治時代から現在に至るまでの手近な資料から、実際の用例を採り、その用法をかいまみたものである。

もとより、体系的に調べたものではなく、抜け落ち・見落としも多々あると思われるが、ある程度はこの符号の使用の移り変わりをうかがうことができたのではないかと考えている。

すなわち、江戸時代は、主として「ゝ」と「ㄣ」が盛んにつかわれた。なかでも「ㄣ」は、仮名にも漢字にも、そして、字数にこだわらず、また、時によっては、数回繰り返して用いられていた。明治になると、一般でも、更に「々」も「ゝ」もつかうようになったが、木版本などでは、「ㄣ」を小さく文字の右下に添えたものもあり、また、この場合、形の上からは、「ゝ」との区別がつきにくいようなものもある。また、「ゝ」を、「ゝ」と同様に、仮名 1 字の繰り返しにつかっている場合もある。また、「々」も小さく文字の右下に添えてつかっているものもある、というように、用い方は極めて多彩である。

戦後、国語施策の推進とともに、公用文の改善が行われ、その一環として、くりかえし符号のつかい方が定められた。

これより先、昭和17年3月、内閣情報局が出した『週報用字例（暫定）』では、この符号を「送り字」とし、つかい方を右のように定めている。

昭和21年6月17日、「次官会議申合せ」で「官庁用語を平易にする標準に関する件」を取り決め、その「官庁用語を平易にする標準」において、

同じ漢字がつづくときは、漢字のくりかへし符号（「々」）を用ひる。同じかながつづくときは、場合によって、かなのくりかへし符号（「ゝ」「ゝ」）を用ひる。

とし、次いで、国語審議会の建議に基づいて定めた「公用文作成の要領」（昭和27.4.4）において、

同じ漢字をくりかえすときには「々」を用いる。

とし、仮名に用いる「ゝ」「ゝ」をやめ、漢字1字の繰り返しの場合だけに「々」を用いることとなって今日に至っている。

しかし、同じ漢字が2字続く場合に、常に「々」を用いるというのではなく、漢字を重ねて用いることもあるし、「々」を用いる場合は、「常々」、「人々」、「山々」のような場合に用いる。公用文では、「小学校校庭」、「〇〇会会場」、「民主主義」などの場合には用いない。また、「々」が行頭にくる場合〔図35、右側〕にも用いない。

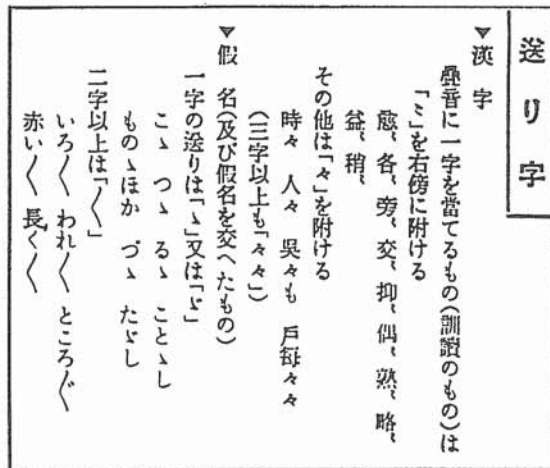
アメリカとカナダでは、多くの人がびとが緑を破壊するこの愚かさを知り、再生への努力を続けている。しかしその努力が実を結ぼうとするのと時を同じくして、光化学スモッグや酸性雨といった、大気汚染による森林破壊が進みつつあった。そして、

2行目
朝日新聞 昭和58.11.18

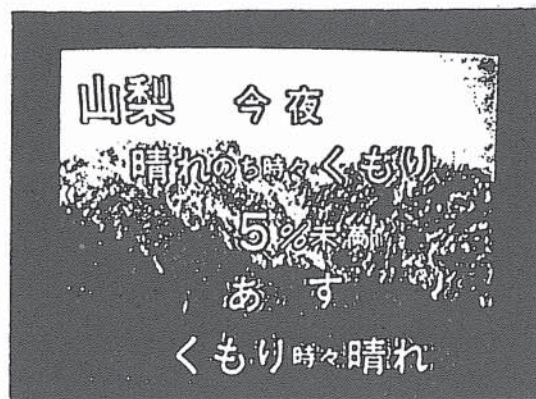
応はまちまちだった。女教師は、電子ゲーム機をやっている子どもたちのところを、次々と回った。他校の子とも

4行目
朝日新聞
昭和58.11.11

〔図35〕



〔図34〕



〔図36〕（映像を撮影したもの）
NHK テレビ、11:55、天気予報 昭和58.11.11

現在では、新聞や放送方面でも、おおむね、公用文に準じているが、新聞では、実際の用例のところに掲げたように、公用文ではつかわない「一歩々々」、「毎日々々」などのつかい方をしているし、また、「一人ひとり」、「早ばや（と）」など、〔図35、左側〕のように、繰り返しの部分を仮書きにしている場合もしばしばある。天気予報では、放送でも、新聞でも、「々」をつかっている。

なお、NHK では、縦書きの場合は、「ゝ」「ゝ」をつかってもよいとしている。

以上のほか、『国語の新しい書き方』（昭和22.5.20、学徒援護会発行）には、「小冊子」に基づいた詳しい解説があり、『文部省刊行物 表記の基準』（昭和25年9月）にも、くりかえし符号のつかい方についての詳しい取り決めがある。

編集・校正・印刷等の現場における各符号の呼び名

くりかえし符号の個々の呼び名は、小冊子によって、一往のよりどころはあるのであるが、実際に日常つかうのには多少かたくなしい感じである。そこで実際の現場では、もっと簡単な通じやすい呼び名があるだろう

符号	A 社	B 社	C 社
ㄣ	片仮名} {返し 平仮名} {送り	チョンのおどり字	平仮名送り
〈	大返し	くのおどり字	2倍送り
々	漢字返し、又は、漢字送り	マのおどり字	漢字送り、 略して、「カンクリ」
ゞ	/	チョンチョンのおどり字	ブルブル
〃	/	/	セコンド

と思って電話で問い合わせ、回答を得た呼び名を二、三紹介しておく。ただし表記は筆者が便宜的に当てたものである。「/」は不明だったもの。

おわりに

以上、甚だ不備であるが、くりかえし符号のつかい方について用例を中心に、その移り変わりを含めて考察し、現状について述べた。現在では、本論で述べたように、公用文では、漢字1字に対する「々」以外はつかわないこととなり、新聞・教科書等でも原則としてこれに準じている。なお、「々」は、「佐々木」とか、「代々木」などの例でも明らかなように、姓や地名等の固有名詞にもつかわれている。名には、「すゞ子」というものもある。子の名には、「ㄣ」、「ゞ」、「〈」なども用いることができる。これは、人名用漢字別表（昭和56年法務省令第五十号を参照）に含まれているわけではないが、世間一般での慣用として、同一文字を繰り返す場合に限り、直上の文字との同一性を表示する符号として用いることができるのである。〔文化庁監修、ぎょうせい発行、『国語表記実務提要』の「命名に関する質問・回答」の項を参照。〕

ただし、個人の使用には、何の制限もない。けれども、個人的な使用も減っているようである。

このように、くりかえし符号の使用が減る傾向にある理由としては、「(1) 木版印刷の場合は、版木を彫るのに、符号の使用によって労力がかなり節約できると思われるが、活版・写真植字・タイプライター等では、ほとんど変わらない。ワードプロセッサの場合も同じである。というよりも、これらの場合は、同じ文字を重ねて使うほうが、むしろ労力の節約になりはしないか。(2) 手書きの場合でも、画数の多い漢字の場合は楽であるが、仮名や画数の少ない漢字の場合は、それほど労力に差がない。(3) 「〈」は横書き（横組み）には不向きであり、また、どの部分を繰り返すのかがはっきりしない場合がある。(4) 公用文・新聞・教科書等でつかわなくなったので、一般に目に触れる機会が少なくなり、個人が手書きする場合にもあまりつかわなくなった。」などのことが考えられる。

〔昭和58年11月26日、稿了〕